

ルカによる福音 6

神の子の誕生

ルカ 2 : 1-7

昨年 6 月に大阪サンケイホールで、アダンの「オー・ホーリーナイト」の音楽解説（中納俊夫リサイタル）をしました時に、「ルカの記事の雰囲気は 12 月 25 日頃の気候ではないから、どちらかと言えば 5 月か 6 月の歌でしょう」と言いましたので、今日また皆さんの前で「10 月初旬か」と言えば、無責任の非難を受けそうですが、二つの想定には根拠もあって、英国の有名な聖書学者ギルモアは“**sometime between April and November**”と書いています。どちらも 12 月 25 日より、事実に近いと言えます。12 月から 3 月まではユダヤでは、夜は寒くて、羊を外に出しっ放しにはしなかったものです。

最初にキリスト降誕祭を祝ったのは、3 世紀のローマの信徒たちでした。しかし、12 月 25 日ではなく 1 月 6 日に祝っておりました。これが 4 世紀になってから 12 月 25 日に改訂されたものです。しかし、1 月の日付も 12 月の日付も、土地の習慣や暦に合わせて、「祭を無理にこしらえた」らしいことを考えると、初代のクリスチャンたちは、少なくとも最初の 300 年ほどは、キリストの誕生日がいつか……というようなことには関心を持たずに、専ら毎週の日曜日だけを熱心に守っていたようです。ということは、初期のクリスチャンたち、とくに福音書を書いた人たちにとっては、主がお生まれになった日付のことは問題ではなくて、事実としてのその意味内容の方が大事だったと見てよいでしょう。

その歴史を変えてしまう程のすごい人物の誕生を、ルカはほんの 10 行足らずで、まことに簡潔に、アツという間に物語ってしまいます。

1. 皇帝アウグストゥスの命令 : 1-3.

1. そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。2. これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。3. 人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。

これは、ガリラヤのナザレの職人だったヨセフと妻のマリアが、どうして100 km 以上も旅をして、ユダヤのベツレヘムまで来たのか、その理由を説明しているのです。

「全世界の人口調査」というのは、私たちにはオーバーに聞こえるでしょうが、当時の言い方では、ローマ帝国の支配の及ぶ範囲のことです。アウグストゥス皇帝は高校の歴史の教科書にも出るとおり、ユリウス・カエサル亡き後の内戦を鎮圧して、「ローマの平和」を確立した人物です。この人の成し遂げた統一とローマの交通網のお蔭で、使徒パウロのような人がガラテヤからギリシャ、ローマまで自由に旅をしてキリストの福音を伝えることができたわけで、その意味でアウグストゥスは、福音の苗床を広大な範囲に準備した功績があります。

「人口調査」と訳している語（ἀπογραφή = census）は、課税のための人工登録でした。ローマ帝国が出したこういう登録令は、たいてい原住地で行なったものですが、エジプトから発見された文書によると、ここにあるように、出身地に帰ってした場合もあったようです。ローマはそれぞれの土地の習慣や実情に合わせて政令の適用を変化させています。

この時は B.C.7 年または 6 年の登録だろうと言われていますが、このいわば本籍地で登録させた事情について、人によってはローマ属領の名目上の国王であったヘロデ大王の知恵ではないか……とも言います。つまりローマの

課税政策を何かユダヤ人自身の民族的な伝統と結びつけて和らげるために、系図による本来の出身地で、もっともらしくユダヤ人としての体裁を整えたのではないか……というのです。もっとも、歴史家のヨセフスは、この登録の形でローマ皇帝への服従を誓わせたのであろうと推測します。

こういう登録は必ずと言っていい位、レジスタンスや一揆を誘発したものです。この時から約 12 年後に、同じキリニウスが一枚囁んでいる課税登録の際に、ガリラヤで大反乱が起こって、使徒行伝の中でラビ・ガマリエルがこれに触れて発言します。ルカ 2 章はその一つ前の登録だと思うのですが、ヨセフスの歴史にも不祥事の言及がない所から見て、比較的平穏に運んだのでしよう。

皇帝アウグストゥスやその徴税武官と思われるキリニウスの名がここに出るのを、あなたはどうか感じになりますか……。 「現実の歴史の中へ神の救いの手が投じられる」ということもそうですが、何より、この高名な権力者が、幼子イエスをナザレからベツレヘムへ運ぶという一事のために、神の手で動かされているのです。シェイクスピアの戯曲の中なででは、世界の歴史を動かす主人のように幕切れの台詞を語りますけれど、本当は、歴史を主宰する神様の手駒のように用いられて、マリアを百数十 km 移動させる旅を誘発しただけなのです。

2. ダビデの町ベツレヘムへ : 4-5.

ヘブライ語の「ベト」は「の家」house of, 「レヘム」は「パン」bread で、「ベト・レヘム」は「パンの家」の意味です。サムエル記上に出るダビデの故郷です。大昔の名はエフラタですから、ミカ書の預言は、「ベツレヘム・エフラタよ」です。無に等しい小さな町からイスラエルの統治者が出る、というのが詩の趣旨です。

ヨハネ福音書の7章によると、イエスがナザレの人だと思いこんでいた群衆が、「この人はキリストである訳はない。キリスト（メシア）ならダビデと同じベツレヘム出身であるはずだ」と言う処がありますが、詩篇 89 やミカ書 5 章の言葉は、この時代のユダヤ人たちには、かなり広く知られて、ベツレヘムに救済の象徴を見る人たちもいたのです。

4. ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。5. 身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。

ヨセフはマタイ 1 章によれば、この頃はもうマリアと式を挙げていた筈ですが、子が生まれるまでは本当の夫婦にならなかったと言います。ルカの記事から考えても、1:56 のあと間もなく挙式して、ヨセフの籍に入っていたと思います。課税登録にまで家族として連れて行っているのですから、この「いいなずけのマリア」という書き方は、少し不自然に聞こえます。多分、ルカの意図はマリアがまだヨセフの妻になっていなかったことと、胎内の子が聖霊によることを暗に表現するのでしょう。

それにしても臨月の妻をどうして、そんな大変な旅に同行したかです。ルカの文では、「臨月になっていたのを」 οὐση ἐγκύω という一句が分詞で付いています。旅行中に出産しそうなマリアを、ヨセフはどうして 100 km 以上も南へ、同行させたのでしょうか。

多くの研究家は、ここにヨセフの思い遣りを見ます。もしマリアをナザレに残していったなら、口さがないナザレの住民は、少なくとも三ヶ月は早い（1:53 直後に挙式したとして）出産を噂の種にしたろうと、というのです。もちろん胎児がヨセフの子ではないということが、ヨセフひとりの胸に収められていたとしてもです。ヨセフは自分のいない所でマリアが悲しい思いをしないよう、守ってやったのかも知れません。

それとも、ヨセフもマリアも、天使の告知を聞いたとき以来、「出産の地はダビデの生地ベツレヘム」と固く決めていた……のでしょうか。そうだとする人もいます。

いずれにせよ、生まれ出る新しい命をガリラヤからユダヤへ、はるばる運ばせたものは、ひとつにはナザレの口うるさいガリラヤ雀、ひとつにはアウグストゥス皇帝の絶対命令です。しかし本当のところは、そんなものは絶対条件でも不可避的事情でもなくて、もっと大きな見えない手がこの胎児を百数十 km 動かして、ベツレヘムに向わせていたのだとそれをルカは伝えたいのではありませんか。

3. 貧しい、あまりにも貧しい誕生 : 6-7.

6. ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、7. 初めての子を産み、布にくるんで飼葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

「宿屋に」と訳した語は「カタリマティ」καταλύματι で、「人がふつう泊まる場所」の意味です。ベツレヘムのような小さな町に「宿屋」を開いて、営業は成り立たなかったでしょう。泊まる人は知り合いの家に詰め合って寝たでしょう。そんな「にわか民宿」を「カタリマ」と言ったのです。そういう普通の場所に二人が泊まれなかった理由は、ヨセフのナザレ出発が遅れたからでしょうか。

それよりも有り得たことは、系図を辿ればダビデに遡るとはいえ、田舎大工か石積み工のようなヨセフの家は、すでに誰からも問題にされないくらい零落していたことです。ダビデの血筋も「ピンからキリまで」あって、ベツレヘムの住民も、全部は付き合いきれなかったと思います。

先日、織田信長没後 400 年祭を愛知県でやっていました。笑われるでしょうが、ちょっと想像を逞しくしてみたのです。愛知県知事から電話がかかって、「織田昭さんですね。実は、当方で調べた結果、あなたが信長公の直系の子孫であることが分かりました。是非、記念式典に……」空想もいいところですが、本当は、明治の新制度で平民も苗字を許されたときに、紀州のある農民が、「織田にしょうら。豊臣はアカナ」と言って選んだくらいのことではないかと想像します。

ユダヤのはそんなのと違って、みな系図を大事にしましたし、証拠が無いと認められなかったものです。それにしてもヨセフは、ダビデの家系でも「キリ」のほうだったのでしょう。もし「ピン」のほうであれば、ベツレヘムでも旧家名家の、それこそ「客間」（協会口語訳）と言えるような部屋を、あけてもらえたでしょう。どんな場所で雨露を凌いだかは明記されませんが、「飼料を入れる床の窪み」（後述）に赤ん坊を寝かすなど、産婦と新生児の貧しさと惨めさを、余すところ無く暗示します。

教父ユスティヌスは、この時より 150 年後の人ですけれど、私たちから見れば、ずっと事実に近い時代の証言者といえます。そのユスティヌスによると、そこは家畜用の洞穴だったと言います。「飼い葉桶」は日本の桶を想像させて不適切な訳語ですが、「ファトニ」φάτινη というのは、壁に掘り込んだ窪み（ニッチ）であったり、石の床を掘って凹ませた浅い穴や、粘土で固めた溝を言いました。シュテーリン Stählin の想像によると、それは生まれたばかりの乳児が動物に蹴られたり、押されたりして怪我しないように守ったのだと言います。普通のオムツに包まれて、誰もそこに王が生まれたとは夢にも思わない、卑しい貧しい場所から、この人の生涯は始まったと、ルカは何の飾りもなく平凡に、散文的に述べて、あとは読者の信仰の目に委ねるのです。

《 結 び 》 神の子のいる余地の無かった世界

最後の1行はもちろん、この時のベツレヘムの宿の話ですけれど、十字架を担われたこの方のその後の生涯をも、暗示しています。ヨハネの言葉(1:11)で言いなおすなら、「言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」のです。

ただ、この後の物語を読むと、この、およそ王様らしくない、普通のオムツと粗末な布にくるまれて、牛や羊の糞か水を入れる溝のような窪んだ所に寝かしてあった赤ん坊を見て、白けずに、そこに神の栄光を見た人たちも何人かいたことが分かります。

そして更にその先を読むと、自分の中にある罪に気づいた人、腐れのように自分の深みを冒している、ある怖ろしいものに気づくだけ大人になった人たちが、やがてこの人の正体に気づき始めた——その次第が語られます。それは、人の罪を背負って死ぬために来た王の姿でした。

その日ベツレヘムの洞穴の中で、粘土の窪みか石の凹みに寝かされていたこの方は、現代の私たちをも、今訪れておられます。彼が普通の宿り場にいる余地が無いことは、今日も同じです。

確かに、日本人もこの人を全く無視しはしない、とも言えます。家畜用の洞穴の「餌入れ」くらいは、また牛の水飲み用の溝っこ位は提供するのです。その証拠に、アバドさんがスカラ座を連れてきて「レクイエム」を振れば、お客さんは入るし、エル・グレコの「受胎告知」や、ルオーの「ミゼレーレ」のような名画を見て、宗教的感動を論じる人は多いでしょう。ビリー・グレアムの伝道講演の雰囲気をも、一晩味わいたくて会場に脚を運ぶ人たちもいるくらいです。

けれども、自分の心の一番神聖なところに、イエスをお迎えしようと、人の生き方を支配する王座へこの方を迎える人は少ないのです。人間の仕事も愛情も、家庭も経済も全部この方に統治して頂かねば……というところまでこの方を迎える人を、この方イエスは求めておられるのです。それでなければ、この王を本当にお迎えしたことになるのです。

(1981/10/11)

《研究者のための注》

1. ローマで12月25日を「降誕祭」として初めて守ったのはA.D.379年、アンティオキアでは少し遅れて388年とされます。クリスマスにまつわる異教性と民族性については、1976年末の講話「クリスマス・ギフト」を、私個人が12月25日をどう守りまた守らずに過してきたかについては、1975年末の講話「クリスマスに無くてならぬもの」を参照してください。
2. 主がお生まれになった場所については、現在は「聖降誕教会」とされている洞窟の会堂が、殉教者ユスティヌスが「家畜用の洞穴」と言った場所にコンスタンティノス大帝が建てたものを、後にユスティニアヌス皇帝が再建したものです。
3. 皇帝アウグストゥス（カエサル・アウグストゥス）は、シェイクスピアの「ジュリアス・シーザー」では、オクタヴィアヌスの名で現われます。Augustus という称号はB.C.27年に元老院から贈られました。ギリシャ語の **σεβαστός** に当たる形容詞で、sacred, grand に相当する尊称です。
4. キリニウス（クレニオ）については、邦訳NTDのレングストルフのルカ註解79～80頁が参考になります。
5. イエスの誕生の年はB.C.6年か7年とされます。西暦年数は教会が不正確に推定したため、降誕が「キリスト前」B.C.に遡るのですが、歴史の年代を今さらずらせることも不便なので、そのままにしてあります。マタイによるとイエスの誕生はヘロデ大王の生存中でした。歴史の資料で確かめられる限り、ヘロデの死がB.C.4年なので、それより先、前項のキリニウスの在任とも結びつけて算出します。この課税登録の年から計算する方法とは別に、マタイ2章に出る星を鍵にして、これを「木星と金星の合」と同一視する人は、B.C.7年と言いきります。NTD別巻のシュニーヴイント註解33～

34 頁を参照。

6. ダビデ王がベツレヘム出身であることについてはサムエル記上 16 章以下、イスラエルの王がダビデの末裔から出る預言は、詩篇 89 : 3, 4、その出生地がベツレヘムであることはミカ 5 : 2 を御覧下さい。このミカ書の講解は 1980 年末の講話「ベツレヘム、エフラタよ」があります。マタイによるこの預言の引用は 2 : 6。なおヨハネ福音書のベツレヘム言及箇所は 7 : 42 です。
7. 前の「口語訳」と「新改訳」は「いいなづけの妻」と訳しました。4 頁で指摘した疑問点を訳語で説明したものでしょうが、「妻」という身分を表わす名詞は原文にはありません。「いいなづけ」という分詞の女性形で、τῆ μνηστευμένη αὐτῷ「彼の許婚の女性と」と書いてあります。
8. 「初めての子」（初子—口語訳）τὸν πρωτότοκον はマリアがこのあとヨセフの妻となって、マコ 26 : 3 に言及されるような子供たちを儲けたのでなければ、使う必要の無い語です。カトリック教会の「マリア終生童貞説」は、マタ 1 : 25 の表現を無意味にしてしまいます。なお新改訳は上記の 2 語（冠詞＋分詞）が男性形であることから「男子の初子を」としています。
9. 「飼い葉桶」と訳してある語が日本の「桶」を連想させて正確でないため、本文中で、「壁に掘り込んだ窪みか、石の床を掘って凹ませた浅い穴」と説明しました。この《φάτινη》には稀に「厩」そのものを指す用例もあり、歴代上 32 : 28 の七十人訳 LXX にある φάτινας もそういう転義に使われています。これと関連して《φάτινη》は戸外にあった家畜の囲いだとする人もあり、この見方を採ると、幼子は屋根の下に置かれず戸外で生まれ、雨露を凌ぐことも出来ない露天に置かれたこととなります。私自身のイメージはそうでなく、やはり飼葉入れの粘土の容器（ヒエロニュモス）か「地べたの石床の溝」としてイメージ化します。